

痴漢されそうになっている

S級美少女を助けたら

隣の席の幼馴染だった

ケンノジ

Illustration フライ



特別書き下ろし短編 第5話



## 5 ピクニックの準備 買い出し編

各々の自転車に乗った俺たちは、最寄りのホームセンターへとやってきた。

「はあ。久しぶりに来ると、色んなものがあつて楽しいね」

あちこちを見回す伏見ふしみが誰にもなく口にした。

「私、工具が見たい……」

「おい、鳥越とりごえ、どこ行く気だ」

てくてくと歩き去ろうとする鳥越の肩を掴む。

工具？ 何で？

「あつ。にーに、シャンプー切れてなかったっけ？」

「切れたのはボディソープだ」

「そうだっけ。そんじゃあ、いつものやつ買っておかないと」

あるけど。ドラッグストアみたいに洗剤やらシャンプーやら薬やらが。

でも、今じゃねえだろ。

「<sup>りょう</sup>諒くん、諒くん！ あっち、ペット！ ペット、あつち！ いる！」

目を輝かせた片言の伏見が、俺の手を引っ張っていく。「こらこら！ 待て待て。俺たちはここにピクニックの

道具を買いに来たのであつて——」

さっきいた場所を振り返ると、茉菜まなも鳥越もいなかっ  
た。

「何でだよ」

フリスビーとバドミントンセット買いに来たはずなの  
に。

「諒くん、結構真面目なんだね？」

「あのな。おちよくってんのか」

はあ、と俺は大きなため息をついた。

「鳥越は工具が見たいなんて、DIY女子みたいなこと  
言い出すし。茉菜は普通に買い物してるし……」

「はああああ……子猫。子猫。ソウ、キュート」

伏見は目をハートにしてショーケースの子猫に見惚れているし。

「思い出せ。ここに何しに来たのか」

ガクガク、と伏見の肩を揺らして、はっと気がついた。

「諒くん、わたし……」

「伏見……気がついたか」

「ウサギも気になつてたんだ」

何でだ！

仕方ないので、レジヤ―用品売り場に行つて、遊び道具を探していく。

結局それぞれ見たいものを見るつていう形になった。自由過ぎかよ。

陳列棚を眺めながら、目的の物を探していく。

お子様用グローブにプラスチックのバット……、あ、あつた。バドミントンセット。

フリスビーも見つけたので、みんなを探す旅に出る。ぶら下がっているプラカードを見て、工具売り場にやってくる。

「……」

鳥越が、電動ドリルに心を奪われていた。

小学生男子かよ。

動くんなら俺もちよつとやってみたいけど。

「おーい、鳥越ー？」

声をかけると、はっと気がついた。

「高森<sup>たかもり</sup>くん、これは、違うの……」

「まだ何も言っていないだろ」

鳥越を仲間にして、今度は伏見と合流するべく、ペトショップコーナーに戻る。

そこでは、伏見が子猫を抱っこしていた。買う人みたいになってるじゃねえか。

「ほら。行くぞ」

店員さんに子猫を預けて、伏見を引きずって歩き出す。今度は茱菜だ。と思ったらカートを押してこっちにやってきた。

「にーに。飲み物あったから適当に選んだけど、これだよかった？」

カートに入っていたのは、切らしていた詰め替え用ボ  
ディソープ、他にはお茶、コーラ、オレンジジュースの  
大きいペットボトル。

「茱菜あゝ」

「え、何」

「やっぱおまえだけにはーにの味方だな」

「何があつたの？」

きよとんとしている茱菜の肩を、俺はぽんぽんと叩い  
た。

「おまえだけが頼りだわ……」

「もう、何？ほんと照れるんだけどおー」

俺が棚から持ってきた物をカートに入れて、俺たちは



会計を済ませた。

そのあと、茱菜を指揮官に仰いだ俺たちは、スーパーで買い物を買済ませ、ピクニックの準備を終えた。

「楽しみだね」

伏見がみんなの声を代弁した。